

忘れてはいけない日がある

田村市・遠藤 琴音(高校生 16)

校外学習で「忘れてはいけない日」があり、震災を知らない子どもたちに伝えていかなければならないと学んだ。

東日本大震災・原子力災害伝承館で震災当時の映像や遺物を見た。津波の激しい音や助けを求める声に胸が締め付けられた。浪江町の震災遺構「請戸小」で、どれほど強く津波が迫ったかを知り言葉を失った。明るく当たり前前の生活が一瞬で変わる恐ろしさを実感した。

二つの施設を訪ねて感じたことは、「知ること」の大切さだ。震災で起きたことを、ただ情報として知ると、実際に現地に行ってみて感じるのとは全く違うものだった。

大地震が起こったときに自分や周りの人の命を守るためにはどうすべきかを、日ごろから真剣に考えておく必要があると強く感じた。次の震災に備え、避難経路を確認し、避難場所を家族と共有する必要がある。

帰り道、空き家が並ぶ街の姿を見て、失われた日常の大切さを感じた。

知識と価値観を広げる図書館

二本松市・三浦 桃果(高校生 16)

図書館にはさまざまな分野の本がある。自分の興味のあるものだけでなく、異なる分野の本にも触れることで、知識や価値観を広げることができる。例えば、勉強のために訪れ館内を見回した時、気になる小説が目につき手に取ることがある。

今の高校生は図書館に行く機会が少なくなっているように感じる。スマートフォンの普及により、紙の本によらずとも、手軽にさまざまな情報を得ることができるようになった。ただ、それだけでは知識に偏りが出てしまう可能性がある。自分の興味のある分野ばかり見てしまう傾向があるからだ。

図書館は、さまざまな分野の本に出会う機会を私たちに与えてくれる。自身の知識や価値観を広げるため、図書館を活用したい。

若い世代

家族の大切さ感じた修学旅行

郡山市・鎌田 優(高校生 16)

私は修学旅行で大事なことに気付いた。それは家族の大切さだ。

広島平和記念公園で見たものは、被災して元の生活に戻れなくなった人、家がなくなった人、目の前で家族を失った人などだった。今の生活がどれほどありがたいかが実感できた。なにげなく過ごす毎日、帰る家があることの大切さに気付くことができた。

関西、広島方面への4泊5日の旅は見慣れぬ景色や料理がとても新鮮だった。お寺や観光地を巡ると、ふと家族の顔が浮かんできた。一緒に見せたい、食べさせたいと思った。家で家族と食事をし、話をし、笑い合う。このようなささいで当たり前に見えることの大切さ。

私は、今まで以上に家族を大切にし、感謝して過ごしていきたい。